美術科教育学会通信 No.55

２００５年２月 24 日発行

通信事務　代表：〒 772-8502　鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地
鳴門教育大学芸術系（美術）講座　橋本泰幸研究室／ Tel. & Fax. 088-687-6481 ／ E-mail：hasimoto@naruto-u.ac.jp
企画・編集：山木朝彦／ Tel. & Fax. 088-687-6485 ／ E-mail：yamaki@naruto-u.ac.jp
編集レイアウト：山田芳明／ Tel. & Fax. 088-687-6636 ／ E-mail：yyamada@naruto-u.ac.jp
企画協力：山田一美（東京学芸大学）　WEB 版：谷口幹也（鳴門教育大学）

2005 年のご挨拶

美術科教育学会代表理事
橋本泰幸 (鳴門教育大学)

新年を迎えすでに 1 ヶ月がすぎました。まもなく立春にもかかわらず厳しい寒さが続いております。会員のみなさまにはご清栄のこととお慶び申し上げます。

昨年はオリンピックでの日本選手の活躍など明るいニュースがあった一方で，大型台風が相次ぎ上陸，年末には中越地震に見舞われるなど，自然の猛威による「災い」の年の観がありました。

学会に関して申し上げれば，学会事務を委託していた学会事務センターの破産により，会費納入をはじめ事務手続き一切が変わったものの，担当会員のご努力により，以前同様，無事に活動を続けております。東西の地区研究部会は計 6 回がすでに開催され, 三月の千葉大会準備, 学会誌編集も順調に進んでおります。

最後になりましたが，会員のみなさまにおかれましては，美術科教育学会の充実は自らの双肩にあるとのお考えのもとに，学会の諸活動に協力下さるよう，切にお願い申し上げます。

もう，菜の花，咲いています
—CHIBA からの招待状ー

大会実行委員長　　長田謙一

SF の好きな人はご存知でしょう。CHIBA City は，1984 年に出版され一世を風靡したウィリアム・ギブソンの処女長編『ニューロマンサー』の舞台です。ポップ・カルチャーをはじめ「現代的」な文化的シンボルにみちみちた 20 年前の未来都市 CHIBA は,「電脳空間」に浮かぶ日常生活を先取りした Cyber City でした。それからおよそ 20 年。かつての「電脳空間」論議が色あせるほど世界はディジタル化を深化させました。同時にこの電子空間の下では,「社会主義体制」の崩壊，中東の相次ぐ戦火，9.11，頻発する「自然」災害，浮遊する殺意といった未曾有の社会的変化の波が次々とおしよせ続けました。この波をかいくぐりながら，はたして < 美術教育 > はいまどこにいるのか，どこへ向かおうとしているのか。20 年前の未来都市 CHIBA は，このような問いを引き受けようとする私たちに格好の < 場 > を提供しえないでしょうか。第 27 回大会に，ご研究成果を携えご参集ください。菜の花，咲いています。

第 27 回美術科教育学会 CHIBA 大会〔第 2 次案内〕

さまざまな「以後」、その先に
—更新しますか びじゅつ　きょういく—

2005 年 3 月 25 日〔金〕－ 27〔日〕千葉大学けやき会館

大会実行委員長　長田謙一 (千葉大学)

21 世紀最初の 5 年目にあたる今年は，「戦後」60 周年の年にも当たります。多くの人々の希望を裏切って新たな戦争の世紀として始まってしまったこの世紀が，人類文化と地球環境にどのように資することが可能か，その真の潜勢力が問われる時にあたって，美術教育にもまたその新たな飛躍と展開が待たれています。それは，美術教育に関わる「戦後」の総体をその深部から問い直すことを，すぐれて現代的な課題として提起してもいます。

だが，「戦後」60 年は，第二次世界大戦後 60 年という，もともとの意味をさらに超えて，さまざまな意味での「以後」の見出しのような位置にあります。「アウシュヴィッツ以後」,「ヒロシマ以後」,「1968 年以後」,「1989 年以後」,「情報革命以後」,「9.11 以後」と，さまざまな「以後」が累積された総括点に「戦後」60 年が位置していると言えるからです。重要なことは，一見いかにもいわば大状況的な次元の問題であるかのようにみえるこの「累積した以後」という構図は，問題を美術教育に絞りこむことによって薄らぐというより，むしろさらに強まるとさえ言えるということです。「モダニズム以後」,「コロニアリズム以後」，そして「美術史の終焉以後」,「美学の終焉以後」，そして「芸術の終焉以後」と，「芸術の終わり」を告げるいくえもの議論の「以後」を私たちは生きているのです。それらの「以後」は決して大人の，あるいは「専門芸術家の美術」に限られた問題ではありません。子どもの美術や「未開美術」問題を浮上させながら展開した 1910 ～ 20 年代の前衛美術以降の「モダン美術」や，広範な勤労大衆の日常生活財の造形を前景化したモダン・デザインの，それらの総体が問いに付されて以後にある私たちは，20 世紀のどの時点よりも一層深く，こどもと大人，「素人と専門家」，女性と男性，西洋と非西洋，白人と有色人種等々の対比構図そのものの根底を問う地点を生きているといわねばならないからです。「芸術以後」ということは，「芸術」そのものを成り立たせてきたこれらの対比構図そのものが問いに付された後，ということに他ならないのです。アメリカで始まり世界の代表的な流れをなすにいたった，美術教育をディシプリンに基づかせて展開しようとする努力にとっても，「芸術以後」問題は，本質的な問いを提起し続けないわけには行きません。「教育」に焦点を移せば，問題はさらに明瞭です。「先進諸国」を軒並み襲った「教育崩壊」問題は，単に一過性のマスコミ的社会問題の次元を超えて，教育という人間文化存立上不可欠の営為のあり方を深部から問う現代的な問いとなって私たちの社会に沈殿していきました。それ「以後」を生きるということは，非「先進諸国」における貧困や戦乱による「教育以前」問題とも連動する，この本質的な問いを引きうけて生きるということを意味しています。そしてさらに私たちが，次に「日本の美術教育」という問題を焦点化しようとするなら，私たちは，以上のすべての「以後」の問題と「日本」という問題の積算を求められることになります。「近代日本」の「美術」・「教育」・「美術教育」は，近代国家日本の抱え込むさまざまな軋轢をそれ自体の問題としても抱え込み，その多くの問題が今日にまで何らかの形で持続しているからです。「敗戦」は，それ「以前 / 以後」の境界・接合面として，近代日本の抱え込んだ問題の切断と継続の総体を絶えず新たに問題として浮上させてくる渦潮の目をなしています。

こうして，現代のこれらの「以後」の問いに深部から答えることこそは，美術教育学という学問的営為の存立の基盤にかかわる最奥の課題となってきているといえないでしょうか。「戦後」60 年，という区切りは，たまたま 60 年経ったという偶然的な次元で捉えられたのではなく，美術教育学の最奥の課題にかかわる本質的な問題としてのさまざまな「以後」のインデックスとして，本大会のテーマに据えられます。さまざまな「以後」を問題として解明し，その先に，日本の＜びじゅつ　きょういく＞をどのようにアップ・デイトしうるか，第 27 回大会はこのような問題意識を前景化して，学会員による 56 本の研究発表と学会外討議者を交えた公開コロキウム等を連関させて，深度と広がりを持った研究的議論の場の創出をめざそうとするものです。この大会を，実際にそのような議論の場として現実化することは，参加学会員及び学会外からのご参加者の手にゆだねられます。

菜の花は，千葉県花です。大会当日のころには，千葉は菜の花のきいろに染まります。皆様の熱心なご参加を願い，菜の花の輝く色彩が，美術教育学の成果を問い新たな発展を期す学会を照らすことを願い，大会を準備いたしております。

【学術討論 (公開コロキウム):「戦後」60 年と美術教育】 総合司会 : 長田謙一 (千葉大学)

上記のテーマに示す課題意識を具体化する場として，学会員研究発表という基本的な場に加えて，今大会では，学会外から，本学会と隣接ないし重なりを持つ諸領域で問題提起的なお仕事をされている方々をゲストに招いて，美術教育学的問題を軸に設定した討論の場を用意しました。討論は，三つのセッションからなります。(発言者氏名はいずれも 50 音順)

I「< 声 > をもとめて――それぞれのマイノリティーから」3 月 26 日 13:00-15:10

発言 : 宇野邦一 (立教大学)・笠原美智子 (東京都現代美術館)・川俣正 (東京芸術大学)

司会・発言 : 金田卓也 (大妻女子大学)

「戦後」60 年を経て，美術教育は，「表現主義」「創造主義」の極と美術文化エレメントのシステマティックな学習・伝授の極の間の振幅の先に，一人一人の人間が応答する関係性への立ち現れを保証する営みの一環として捉えなおされるべき次元を探り当てていないであろうか。そのような応答関係の中に立つ力を，ここでは < 声 > として象徴的にかたることにし，そのさまざまな意味での声を発し声を受けとめる関係性の中にひとりひとりが立つという課題の核心部に, それぞれの声を発しはじめることにかかわる「マイノリティー」の覚醒・励起という問題を想定することが出来るであろう。このセッションではこの問題を軸として討論を行う。

II「なにかがかわった――美術・デザイン・世界の変容」3 月 26 日 15:30-17:30

発言 : 逢坂恵理子 (水戸芸術館)・柏木博 (武蔵野美術大学)・熊倉敬聡 (慶應義塾大学)

司会・発言 : 山木朝彦 (鳴門教育大学)

「戦後」60 年の間に，日本の美術・デザイン風景は大きく塗り替えられていった。敗戦を機に主としてアメリカ経由でモダニズムが流入し，美術をもデザインをも更新していきた。しかし，1980 年代には，美術にもデザインにも，それまでのパラダイムをなしてきたモダニズムをその土台から問い直そうとする「ポスト・モダニズム」の新たな奔流が押し寄せ，さらに世界の電子情報化と社会主義体制の崩壊並びにアジア諸国の飛躍等を条件としたグローバリゼーションなどが加わり，美術・デザイン風景もまたさらに更新されてきた。しかしまた，この変容の中で，西洋の諸制度を移入してきた日本近代美術のあり方が総体として問題化してきている。これらの変容が美術教育にとって何を意味するのか，視座を美術教育にすえて討論する。

III「広場へ――美術教育研究の場」　3 月 27 日 14:30-16:30

発言 : 榎原弘二郎 (大学美術教育学会・埼玉大学)・冨安敬二 (全国造形研究連絡協議会・立教大学)

藤沢英昭 (日本教育大学協会二部会・千葉大学)

司会・発言 : 橋本泰幸 (美術科教育学会・鳴門教育大学)

美術教育学界では，近年のいくつかの「論争」や，本学会誌レビューの開始などにみられるように，研究的議論が活発化し，そのための多様な場も形成されようとしている。しかし，課題の重要性からすれば，議論の幅・量・場等は未だ充分ではなく，ほとんど同一目的を掲げる諸学会並存の状況にも変化は見られない。また , 美術教育実践と研究の連関の仕方をめぐる議論もようやく緒についた段階にある。さらにまた，美術教育界外の諸領域の人々との間にも積極的な討議が展開され，美術教育が社会や美術界の重要な課題として意識されるという，1900 年前後の欧米や 1960 年前後の日本に見られたような状況も開かれていない。本セッションでは，美術教育研究に関わるいくつかの代表的学会・研究組織の課題を把握されているお立場のゲストをお招きし，先行セッション及び本大会諸研究発表を踏まえつつ，現代日本における美術教育研究の特に中心的な課題を共に探り，さらには，より大きく深い研究交流の場を展望する可能性をも探る。

【次頁に続く】

【大会日程】同封チラシ裏面を御覧ください。

【参加申し込み方法】

３月 15 日まで (以後の申込みも可能ですが，準備の都合上是非この日までにお申込み下さい)

学会員は同封 (または郵便局備付け) 郵便払込取扱票によって諸費用を申し込むことをもって参加申し込みとさせていただきます。(払い込み費用は, 払い込み者のご負担でお願いいたします)。諸費用は大会参加費・懇親会費・弁当代からなっています。払い込まれた諸費用は原則として返還いたしませんので，ご理解願います。また，払込取扱票にはご参加希望研究発表セッションを時間帯ごとにお示しください。

払込口座番号　00110 － 1 － 542574

加入者名　　第 27 回美術科教育学会 CHIBA 大会実行委員会

大会参加費 5000 円

(非学会員 3500 円 ; コロキウムのみ参加非学会員 2000 円)

懇親会費　6000 円 (学生・院生 2000 円)

26 日弁当 A500 円 B700 円，　27 日弁当 A500 円 B700 円

（土，日曜は学生食堂が利用できません。近隣には飲食店があまりありません。）

3 月 16 日以後の参加申し込みについては，当日受付でお願いします。

【宿泊申し込み】

大会実行委員会では，宿泊の手配はいたしません。千葉大学生協に委託してありますので，同封申込書にしたがってお申し込みいただくか，ご自分で宿泊先をお探しください。

【お詫びと訂正 : チラシの誤り】

同封チラシ裏面の日程表に, 誤植があります。大変失礼いたしました。お詫びして訂正させていただきます。なお当日配布の概要集には訂正した日程表が掲載されます。

(誤 → 正)

3 月 25 日 B-14:30-14:55　健闘させる → 検討させる

C-15:00-15:25　受容家庭 → 受容過程

D15:30-15:55　　猪俣裕美 → 猪股裕美

3 月 27 日 I-11:00-11:25　　美術家 → 美術科 新関新也 → 新関伸也

【問合せ先】

〒 262-8522

千葉市稲毛区弥生町 1 － 33

千葉大学教育学部芸術学 (長田謙一) 研究室内

第 27 回美術科教育学会 CHIBA 大会実行委員会事務局

PHONE/FAX　　043 － 290 － 2658

大会最終日まで期間限定携帯電話　080 － 3449 － 4717

長田謙一研究室 Phone/FAX　　043 － 290 － 3580

長田謙一　　E-Mail k.nagata@faculty.chiba-u.jp

報告　第８回東地区会＜フォーラム in 東京学芸大学＞

日　時：2004 年 12 月 25 日（土）午後２時～５時
会　場：東京学芸大学 20 周年記念会館第４会議室
テーマ「美術教育を取り巻くキーワードと実践的課題」
ー学び合う関係をどう構築するかー

本フォーラムは，構成主義やアフォーダンス，状況的学習論，ユビキタス，プレジャラビリティなどのキーワードをもとに，美術教育の実践的課題を探ることをねらいとして行われました。

【第一部／実践を踏まえた話題提供】

第一部では，相田隆司先生の開会を受けて，四人の先生（下記）にキーワードにかかわる視点を踏まえて 15 分ずつの映像資料をもとに実践を紹介して頂きました。各実践の内容はこのキーワードに即して行われたものではありませんが，須田先生と林先生には構成主義と状況的学習論の視点から，南先生にはアフォーダンスの視点から，正木先生にはユビキタスとプレジャラビリティの視点から話題を提供して頂きました。その後，前半の押さえとして，山田が 1970 年代以降の認知研究から今日のネットワーク研究までの動向を紹介し，キーワードの整理を試みて後半につなぎました。

＜報告者・内容＞

・須田一成（山形県長井市立長井北中学校）「題材『万華鏡をつくろう』から」社会的構成主義の学習論から導いた美術教育の視点を踏まえた実践事例と取組

・林　耕史（筑波大学附属小学校）「造形エンカウンターの試み」「共生共創」と「造形的なやりとり」の実践事例と造形授業

・南　育子（東京都墨田区立第三寺島小学校／都図研研究局長）「国立西洋美術館連携授業を振り返って」ことばでつないでいくこと，子どもの感性を前向きに捉えることば＝「気になる」を鑑賞の切り口に，みんなで見て何かを高めることとは

・正木賢一（東京学芸大学・ビジュアルデザイン）「展示用プロモーション映像の編集を通して」日常の授業風景や題材研究を紹介する映像の編集，都内小学校から提供された映像の編集，大学での授業実践「映像メディア表現」の実践から

【第二部／討論】

休憩を挟んで後半の第二部では，直江俊雄先生が司会者となり，パネリストの各先生にキーワードごとの感想や考えを述べてもらいました。各キーワードの概念は難解なところもありましたが，各先生とも実践的手応えをもとに視点をまとめて話され，参加者 30 名程度の小さなフォーラムながら充実した時間をつくれたと思います。

フロアーを交えての質疑では，残された時間が十分でなかったのですが，核心に迫る指摘や意見が出されたことはかけがえのない成果の一つとなったように思います。

最後に宮脇　理先生にコメントを頂きました。先生には，最近の中国の教育事情を引き合いに，本フォーラムの論点の意味と美術教育の今後のビジョンについて示唆を頂きました。なお，当日の配布資料をご希望の方はご一報ください。

（報告者：東京学芸大学　山田一美）

報告　第７回西地区会＜シンポジウム in 京都＞

日　時：2004 年 12 月４日（土）13:00（受付）～ 16:50
会　場：京都国立近代美術館　講堂
テーマ「これからの美術教育」
ー美術を身近なものにするために，学校と美術館がいま，できることー

各地で美術館が整備されたとはいえ，ただ学校が美術館に子どもを送り込むという図式は成立しません。今後の美術教育は，学校を出てから美術といかにかかわりが持てるか，という鑑賞教育の視点も重要です。そのために学校と美術館はどういう関係を構築するか，そこでできることできないことは何か等，可能性や課題，鑑賞教育のあり方について探ろうという趣旨で設定した本研究会の概要を報告します。主催は，鑑賞教育研究プロジェクト（平成 15 ～ 17 年度科学研究費補助金（基盤 C）課題番号：15530585），京都国立近代美術館および本学会です。

１．開会挨拶　橋本泰幸氏（本学会代表理事），山野英嗣氏（京都国立近代美術館）

２．基調報告

筆者の趣旨説明の後，基調報告として，松村一樹氏（京都市立伏見南浜小）が「地域の美術館所蔵作品を身近なものにする試み―作品の教材化と美術館の利用―」で京都近美のモンドリアン等を扱った実践を，小泉薫氏（お茶の水女子大附属中）が「中学校における鑑賞教育と東京国立近代美術館との連携における新たな試み―３年間を通して活用できる鑑賞プログラム作りを目指して―」で色・形などカリキュラム内容と所蔵作品を関連づける報告をしました。次に，岡山万里氏（大原美術館）が「鑑賞教育研究プロジェクト岡山地区中間報告―パズルを使った活動―」で地域の３小学校とで距離に応じた実践形態の工夫など，学校や美術館の立場から両者が連携した鑑賞実践とその知見が報告されました。

３．シンポジウム

制度の違いを超え学校と美術館がどうかかわれるかについて，次の論点で展開しました。

・両者はどういう関係であればよいか：足立彰氏（京都教育大附属中）は，時数削減のなか美術の密度を高めたいとし，一條彰子氏（東京国立近美）は，将来の鑑賞者を育てる視点から美術館の教育力を高める効果を指摘，平尾隆史氏（京都市立石田小）は，現場教師が美術館を身近なものに，岡本康明氏（宇都宮美術館）は，個としての美術鑑賞の保障を強調しました。

・鑑賞とはどうあればよいか（評価について，言語化について）：多様な見解が提示されましたが，第三者が外部から評定することには共に否定的で，鑑賞を場面だけで測ることは危険，子どもの中でどう変わるかが重要という点で共通しています。言語化は，言語の持つイメージの伝達力を重視しつつ，それを鑑賞でどう用いるかは教師の意図や判断によると指摘されました。

参会者からの質疑：鈴木幹雄氏（神戸大学）；鑑賞の言語化が制作の変容にどう関与するか，教師の判断が今後の課題。北村英之氏（同志社大院生）；教師の意図を先読みする子ども，対話力を高める方法。鬼本佳代子氏（福岡市美術館）；美術館の変化を教師にどう伝えるか，等。

４．まとめと閉会挨拶

橋本泰幸氏：学校と美術館は，造形コミュニケーションに関して棲み分けること。

花篤實氏（西地区統括理事）：学会成立の経緯と西地区研究会の紹介，今回の意義について。

この研究会を通して，美術館が変わりつつある，学校も変わらなければならない，という指摘が印象的でした。

（報告者：京都教育大学　石川　誠）

報告　第８回西地区会＜映画鑑賞＆シンポジウム in 徳島＞

日　時：2004 年 1 月 29 日（土）12:00（受付）～ 17：00
会　場：鳴門教育大学附属小学校
テーマ「いま，なぜ　造形教育なのか」
ー「トントンギコギコ図工の時間」から見えてくる子どもの造形的学びー

１．映画「トントンギコギコ図工の時間」の鑑賞

２．シンポジウム　映画の内容を参加者全員で共有し，子どもが造形活動のなかでどのような学びを行っているのか，造形教育の今日的課題について等の議論が展開されました。

◆シンポジストから（発表はそれぞれ精緻な内容でしたが，ここでは要点のみ報告者がまとめさせていただきました）

佐々木晃…「見つけながらつくっていくことが大切なんだ」という授業者の言葉は幼児教育が大切にしていること。さまざまな環境物にかかわりながら自分自身の成長を見つけるということが大切。幼稚園では「ものをつくりながら自分をつくっていく」ということが大切だと考える。

白石謙二…授業者には指導理念を感じ取ることができ，それが子どもたちの表現の欲求や本能を満たし，クリエイトすることの歓びを充分に味わうことにつながっていた。小学校では，図画工作科を通してコミュニケーション能力を育みたいと考えている。その対象は，自己，他者，材料や環境と多様であるが，映画中にそれらのコミュニケーションの姿がよくれた。

井上史朗…ここで映し出される授業の内容にはがかなり高い指導力と指導内容が見て取れた。やはり，指導することは指導しないといけない。教える内容を考える必要があろう。ただ，絵画が見えなかった。指導のバランスが大切ではないか。その点，小・中の連携の必要性を感じる。

川人健司…障害のある子どもの図工美術の姿を基本にしていくことで図工本来の姿が見えてくる。養護学校の場合には障害の特性があるので，意欲などの問題だけでは解決できなことがある。通常の学級にも数パーセントこのような子どもがいる。私たちは子どものＱ．Ｏ．Ｌ．（生活の質）を高めることを大切にしているが，映画の中にはそのようなシーンが見られた。

西尾正寛…子どもがものをつくったり書いたりすることの始まりにある無意図的な行為と，知的な面が結びつく連鎖が大切である。思春期に既存のものを解釈するために質的な感覚的な価値形成を指していこうと思えば自分でよさ，美しさを見つけてそれを表そうとする経験をさせていくということが必要であり，技法はそういう過程で付随してくるものであろう。

◆ フロアーより

・この映画は羽仁進監督の「絵を描く子供たち」を意識しているのではないか。「絵を…」が小学校１年生を扱っていたのに対して，この映画は５年生６年生を対象としていることや，「絵を…」が絵を中心にしていたのに対して，本作ではつくりたいものをつくるという工作が主であることなど，両者を比較すると小・中連携やコミュニケーションの問題等，今日的な課題が見えてくるのではないだろうか。

３，まとめ　花篤實（西地区統括理事）

西地区会は，ここ数回続けて学力問題を取り上げている。「学力とは何か」が，現在の教育現場の基本的課題であろう。そういった意味で，映画は新しい学力感にそった指導技術として参考になるであろう。多校種の先生方を集めて行ったことは意義深い。現在は，感性感覚の表出にとどまらない，内発的動機付けに基づく新しい指導が求められている。

（報告者：鳴門教育大学　山田芳明）

国際交流と斯界・斯学

宮脇　理 (元 筑波大学／中国・華東師範大学／厦門大学 顧問教授)

国際交流

○○○

触れあう機縁を作るという点で，文章や音楽による交流に優る幾多の長所を持っている・・・・後略・・・・・」と。次いで森戸は「・・・・・・手紙や出版物を通して，文章の交換をすることも最も直接的なよい仕事である。だが，それらは両方とも，それぞれの問題を伴っている。・・・・・中略・・・進んで生徒の國際的相互理解の方法としては，民族平等の見地からすれば考うるべき幾多の点が残されてはしないか・・・後略・・・・」。これに続く森戸の論調には，敗戦直後の再生日本への気概に溢れているのを感じ取ることができます。

○森戸辰男についての点描

前述の教育美術振興会への関わりもさることながら，敗戦後，教育基本法・学校教育法の制定を担った，田中耕太郎の 8 ヶ月余（1946：昭和 21 年 5 月 22 日～翌年 1 月 31 日）を凌ぐように，森戸が当時の社会党：片山内閣期 (1947：昭和 22 年 6 月 1 日～ 1948：昭 23 年 3 月 10 日)，つづく芦田内閣成立後の 10 月 15 日まで，およそ 1 年 4 ヶ月にわたる占領期の文部大臣を務めたことは，この国の教育史に大きな足跡を残したといえます。また，氏の自負に満ちた仕事や気概こそは，いわゆる森戸事件・・・・・・(森戸が東京帝国大学経済学部助教授当時の 1919 年〈大正 8〉末に発売された，東大経済学研究会機関誌『経済学研究』号に発表した／「クロポトキン（国家を廃した小組織の連合による社会を主張した当時のロシアの社会思想家・地理学者）思想の研究」／が，興国同志会の策謀により危険思想と攻撃され，政府もこれを問題化して，1920（大正 9）1 月 10 日に休職処分となる史実) の重みにも繋がる気概なのでしょうか。(広島大学図書館に収蔵されている「森戸辰男関係史料」は，初代広島大学学長森戸辰男個人の履歴，書籍類を中心とする森戸文庫，および公文書・私文書などから成り立っています。〈森戸文書研究会編〉「広島大学所蔵森戸辰男関係文書目録全２巻」参照)。

○隠喩：“他山の石” と拡がり

「小さな差異ほど，違いは大きい」ことの実感は，近隣諸国との相互交流の中で特に感じる，私事的印象です。確かに「青少年生徒の絵画の国際的な交流」を謳った森戸提案は，斯界・斯学からの国際交流を視野に収めた原型ではありました。しかし，いまや “戦後” も還暦を迎えた現在,“原型提示”のママで粋 (イキ) がる訳にはいかないでしょう。比喩的に云えば【熱物 (あつもの) に懲りて “膾：なます” を吹く】程度の，大勢に対する逆提案では済まされないということです。とりわけ日本と漢字圏の国々とは，対等意識と文化のなだらかな移動・影響・変化が双方の自意識に絡んで,それこそ“小さな差異ほど,違いは大きい”ことに気づくことが間々あります。したがって筆者は【故事成語（こじせいご)】に視られる「他山の石」(他者と自己) の立場での発言，応答に臨んでいます。

衆知の「他山の石」の謂れは，中国最古の詩篇として知られる周時代（～前 256）の詩歌を収めた『詩経』の一つですが (略),“詩経” には,純粋な人々の素直な喜怒哀楽が溢れており,極めて素朴にして人間的な味わいがあり，“詩経” が日本の “万葉集” に喩えられているのも自然なことです。

視覚メディアと文字情報との相補関係を結ぶことで，国際交流への深みへ入ることが可能であると思えます。しかし，この普遍的な格言をもって対象への深みに分け入るには，双方の国の少なくとも近代史,近代文化史に精通し,かつ秀でた語学が必要なことは必定です。したがって国際交流へ一歩も二歩も踏み込むには，視覚媒体を的確に解釈・批評できる翻訳者の登場こそが，現在に見合った必須の眼差しと思えます。

文献解題　学術文献の紹介と解説　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

佐藤道信著　『明治国家と近代美術—美の政治学—』

吉川弘文館，1999

中村幸子（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程
教科教育実践学専攻芸術教育連合講座）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Books 新刊紹介 会員が執筆した本の紹介 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フィルムアート社＋ Practica・ネットワーク編『アート・リテラシー入門』
フィルムアート社，2004 年，1900 円（税別）
ISBN：4845904675

吉村壮明（沖縄キリスト教短期大学／京都市立芸術大学大学院博士後期課程）

＊＊

「表現するオーディエンス」のための実践的テキスト。この『アート・リテラシー入門』を一言で言うならば，そういえるだろう。本書は『アートレス』や『セルフ・エデュケーション時代』等を出版しているフィルムアート社から刊行されたもので，その内容は美術教育研究者や精神科医，美術批評家，学芸員，作曲家，アートセラピストら蒼々たる 18 人の論者によって執筆されており，そこで論じられる対象は美術，映像，音楽，セラピー，写真，ダンス，建築，文学と実に幅広い。

本書『アート・リテラシー入門』では，現代を「アートが溢れる物足りない時代」（p.28）と画定し，その為の読み書き能力の重要さが述べられているが，目的とされているのは，単なる美術史や芸術学的知識ではなく，オーディエンスの生の感性を重視したアート理解であって，その事は冒頭で「自分の確信で，間違ってもいいから語ることの潔さが，ポジティヴな創造性」（p.9）であると簡潔に述べられている。なるほど，確かに一枚の写真であっても，それを見る場所や鑑賞者のイデオロギーによって解釈が一変することは実感として知られているし，これが「アート・リテラシー」の今日的な目的だと言えよう。興味深いのは，その為には最低，「センシュアス（感覚的）であること」と「既存の見方を変える」という二つの作業が提示され（p.9），それぞれ前者が「予感，気配や光と影，響き，感情」，後者が「切り取る，落ちる，倒れる，複数のまなざし，流線，曲線，饒舌と寡黙」というキーワードによって論じられている点だ。加えて，対談や基本文献紹介といった形式を盛り込み，あらゆる角度から「アート・リテラシー」というフレームを浮上させようとする意図がみてとれる。また，本書の裏表紙に「表現するオーディエンス」とは「スーパーフラットな日本文化に埋没しない人」と述べられており，この点は日本におけるオタク的感性や現在の現代美術の観点からも興味深いところだ。

かつてバルトやエーコ，あるいはイーザーやヤウスらに代表される受容理論の分野で作者／鑑賞者（読者）の関係が論じられ，「作者の死」や「開かれた作品」，「内包された読者」，「期待の地平」といったテクストをめぐる言説が語られたが，本書はそういった芸術学的な理論に傾向するのではなく，あくまで実践念頭において展開されているのが秀逸な点だといえよう。若林直樹は，その著書『アート系第三世代』で「アート」から「アート系」への世代的移行を述べていたが，誰もが「アート系」に直面するようになった第三世代の現在，膨大なアート系イメージをどう読めばいいのかという方向を示唆するものとなっている。一見，その幅の広さに当惑しがちだが，それは本書でも述べられている通り，アーツ（Arts）ゆえの幅広さの為であり，アート・リテラシーの入門にうってつけの文献である事は間違いない。美術教育的な観点からみた場合，本書の核である「生の感覚によるアート理解」とは，言うまでも無く，いわゆる「美術の教育」やディシプリンとしての美術教育，鑑賞教育といったテーマに敷衍されるものであり，やはり現代の美術教育が考えなければならない重要な課題の一つであるだろう。

事務局より

◆年会費未納分の納入のお願い

本年１月中旬に，平成 16 年度分までの年会費未納分の納入のお願いを行いました。対象となった会員の方にはすでにお知らせ致しましたが，年会費未納期間が２年となった場合は，学会通信，学会誌『美術教育学』の送付を停止させていただくことになります。健全な学会運営のためにご理解いただき，年会費未納分がある方は至急ご入金下さいますようお願い申し上げます。また，本通信が会員の皆様のお手元に届くのが遅くなった場合を考慮し，改めて年会費納入期限を以下の通り設定させて頂きます。

年会費未納分の納入期限：３月８日（火）

郵便払込取扱票への記載事項

◆郵便振替口座　　口座番号　０１６１０－９－１１１２２９

　　口座名称　　美術科教育学会

◆通信欄記入事項　①「平成〇〇年度年会費」，②住所変更の連絡等

◆年会費　　平成 16 年度分　　正会員：8,000 円

※未納金額の累計は各未納者にお知らせしてあります。

◆平成 17 年度の年会費納入について

美術科教育学会では，年度ごとに年会費の納入をお願いしております。平成 17 年度年会費は３月発行予定の学会誌『美術教育学』送付時に入金のお願いを致します。郵便払込取扱票を同封しお送り致しますので，お早めのご入金をお願い致します。

◆住所変更等があった場合は事務局にお知らせ下さい！

現在，学会事務局にて，会員の皆様の所属，現住所，会費納入状況等のデータを管理しております。しかし現在の会員データでは，数十名の方の所属の移動，新住所等のデータが更新されていない状況が見受けられます。会員の皆様で住所変更等があった場合は，速やかに学会事務局にご連絡下さりますようお願い申し上げます。また，所属変更，新住所の連絡がまだお済みでない会員の方は至急，学会事務局までご連絡下さい。

連絡先：総務担当（谷口）t.mikiya@naruto-u.ac.jp

◆新入会員の紹介

新妻悦子（コパン美術教育研究所），武藤智子（茨城町立立川根小学校），名達英詔（東京学芸大学附属竹早小学校），野口基（清水町立清水中学校），小倉千絵（大子町立大子中学校），森優子（東京家政学院筑波女子大学短期大学部），森芳功（徳島県立近代美術館），阿部由実子（上越教育大学大学院），桐原直子（筑波大学大学院博士課程），柿島美香子（伊那市立春富中学校），久永葵（京都教育大学），髙橋玉恵（すどう美術館），石原麻衣（京都市立芸術大学大学院），宮本恭二郎（広島大学大学院），胡文涛（広島大学大学院），細野泰久（岩手県立青山養護学校），猪俣裕美（千葉大学大学院），堀内理香（高知県立佐川高校），濱口由美（徳島市富田小学校），竹内利夫（徳島県立近代美術館），田中俊之（常葉学園大学），堀込直道（群馬大学大学院），吉永雅明（埼玉県立熊谷養護学校），山本敏子（佐那河内小学校）

※平成 17 年２月２日までに入会手続きが完了した方をご紹介いたしました。
当該年度の年会費納入をもって入会手続き完了とさせて頂いております。

◆美術科教育学会通信は投稿原稿を募集します。

くわしくは学会情報コーナーの URL（http://www.naruto-u.ac.jp/%7Eart/aae/）をご覧ください。